「歌のおもしろさ」

歌　人
河　野　裕　子 委員
（第４回会議　平成18年５月26日）

短歌についてご興味のある方は少ないかと思うんですが，こういう機会に「短歌とはどういうものなのか」ということを聞いて帰っていただければありがたいと思います。

タイトルは「歌のおもしろさ」とさせていただきました。なるべく皆様がご存知の作品をと思って挙げてまいりました。短歌というのは，みなさんご存知のように世界中で最も古い詩型ではないかと思います。記紀歌謡から数えてもう約1300年の歴史を持っているわけでして，しかも俳句は別にして，五・七・五・七・七，31文字でひとつの世界を作っていくという大変不思議な詩型です。どんな新聞でも必ず短歌・俳句の欄があり，朝日新聞は第１面の左端に大岡信さんが「折々の歌」というアンソロジーを30年ちかく連載なさっておりました。そういう詩歌というものをいつも身近に感じている日本人の国民性を改めて思います。

そんなわけで，万葉集最大の歌人と言われております柿本人麻呂の歌を挙げております。

「東（ひむがし）の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」

これは，大和の安騎野というところを舞台にしておりまして，人麻呂が草壁皇子の息子である軽皇子のお供をして，狩猟をしたときの歌です。季節は冬。東の野原から「かぎろひの立つ見えて」というのは陽炎が立つのが見える。そして，振り返ってみると西の方には月が傾いているんだと。大変大きな景色，景を詠んだ歌だという感じが致します。けれど，実際，安騎野に行ってみますと，大変狭いところでして，短歌という詩型は小さなものを詠んで，大きく感じさせることができる。この定型の枠の中で景色を詠んでみると，とても大きな世界を表現することができる。これは私アメリカに２年ほど住んでおりましたけれども，あの広い広いところで，歌を作るということは大変でした。大きな景色を詠むことができないのです。ワンダフルとビューティフルと言ってしまったらもう終わり。日本に帰って改めて思いましたのは，短歌という詩型は日本の湿潤な，谷崎潤一郎に『陰翳礼賛』というのがありますけれども，この暗くて湿ったところからつくるといいのが出来るということを改めて思いました。あんまりドライで広いところでは，日本語はうまく機能しない。この歌を挙げてきましたのは，大変小さな場所ではあるけれども，短歌にするととても広々とした景を表現することができるということなんですね。それから，「ひむがしののにかぎろひの」とこうありますけれども，アイウエオの母音の中のイ音は母音のアに対して口をしぼめる音なんですね。イ音を使いますと，大変厳しい，さびしい感じ

がいたします。さびしいと言いますからね。イ音が３回使われておりますけれども，この言葉だけからでも冬の野であるということが響いてきます。それから，短歌は小さな詩型であるからこそ，小さな景から大きな景を表現することができる詩型であるということをひとつ押さえておきたいと思います。

「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲」佐佐木信綱さんのこの歌は教科書によく載っていますので，みなさんご存知だと思います。信綱さんは，今お孫さんの佐佐木幸綱さんが継いでいらっしゃる「心の花」という結社をつくられた。それから「梁塵秘抄」の研究なんかもなさいまして，佐佐木家は文武両道の長い歴史を持った家系です。佐佐木信綱さんの代表歌です。

まず，「ゆく秋の」大きな季節ですね。漠然とした季節。そして「大和の国」。奈良の平野というのでしょうか。それから，そこにある，薬師寺がある。その上に塔があり，そして塔の上のひとひらの雲というふうに，大きなものからずーっと小さなものに絞り込んでいく。これを「の」という言葉でつなぎながらうまく景を表している。景を絞り込みながら写真でピントを合わせるように，ぴたっと合わせて，しかも全体が見えて，非常にリズムのいい歌を作る。こんな短い詩型なのに，そういうことがぱっと見えて，しかもピントの合わせ方もできるんだと，大変不思議な詩型です。景を絞り込むということができます。これはやっぱり「の」のリズムが作ってくれるひとつの世界ではないかと思います。いい歌だと思います。すーっと雲にまで絞り込んでいく辺りの気分の良さというのをなかなかうまく表現していますね。

「あぢさゐの藍のつゆけき花ありぬぬばたまの夜あかねさす昼」佐藤佐太郎。

近代100年のうち，一番の歌人斉藤茂吉の一番弟子，高弟であった佐太郎の歌。

これは，意味としては，ただ，アジサイの花が咲いていたよ。朝も昼も。そのことしか言っておりませんが，すぐ憶えてしまう。憶えてしまうということは愛誦性があるということで，なぜその愛誦性を生むかということを分析してみますと，まず，人麻呂の場合はイ音ということを申しましたが，この歌の場合は母音のアが非常に多い。12のア母音を使っている。それから，漢字は藍と，花と夜と昼しか使っていない。この視覚上からの風通しの良さも短歌にとっては，たいせつなものでして，見て感じのいい感じがします。それから，下の句は「ぬばたまの夜あかねさす昼」というふうに，枕詞を使っているんですね。普通，一首のなかに枕詞を２回も使うと大変煩わしい気がいたしますけれども，この場合はむしろ，効果的に働いていると思います。アの音が大変多いということと，歌の中で余計な意味が何もないということが愛誦性のひとつの条件であるのではないかと思います。それから「あじさい」というのは紫の太陽の花と書きますけれども，この歌には「あぢさゐ」とわざわざひらがなで書いてあるんですね。しかも旧かなづかい。「あぢさゐ」と「あじさい」とは視覚の上からも別物になる。この歌の場合は決して漢字を使っちゃだめだよと思うのは，紫の陽の花と書くと藍が死んでしまうんですね。紫と藍が相殺し合う。だから，実際あじさいの花は藍色ではありませんが，佐太郎はあじさいのア母音を使うために藍ということを使ったんだと思います。漢字をわざわざ捨ててひらがなで「あぢ

さゐ」と書いた。そういうような計算があるわけですね。歌人というのはおもしろいもので，こういうようなことを瞬間的にぱっと集中しながらやっちゃうんですね。推敲以前に集中したときにパーッと言葉が生まれてきて，わっと広がるときの，あの感じだと思うんです。これは佐太郎の代表作でありますし，紫陽花の代表歌です。例えば愛誦性といいますと若山牧水の「白鳥は悲しからずや空の青　海のあをにも染まずただよふ」という歌がありますけれど，中身はないけれども，つい覚えてしまう。この様に，歌の言葉のリズム，日本語のリズムというものが作ってくれる世界があるわけですね。

それから，表現についてという大変難しいことを書いてしまいましたけれども，たとえば，とてもいい景色にめぐり会ったり，なんか非常に大きな舞台に立ったときに，よく河野さん短歌やってるんだから，一句どうですかと言われるんですが，歌は一句ではなく，一首なんですね。とにかく感動したら歌ができるように思われがちなんですが，感動というのはそんな簡単なものではない。31文字の中に自分の感動したことを全部入れるというのは無理なんです。文字の中は隙間だらけにしておいて，今の紫陽花の歌のようになんにも言わないことによって何かを感じさせるというのは非常に難しいし，おもしろいし，詠んでいても読んでいても楽しいわけなんです。言葉と言葉をつなぎ合わせて，31文字の定型のなかで，ぴたっと言葉がゆるぎなく動かないように作るときに，思わずふっと飛ぶんですね。こういう短詩型というのは省略と飛躍が大事で，言葉を省略しながら飛ばす。この辺の息のしかたというのが，会得するまでずいぶんかかります。とても難しくて大変なのですが，まあ，3年もしたらできるんですけどもね。3年経って自分の文体ができかける，それから先が問題です。それから，学校の先生方の前でよく話をしたりしますが，先生方はともかく教えて意味をとらせて，試験をして点数をどういうふうに配分するかばかりを考えてやっていらっしゃる。それはやめてくださいと言うんですよ。歌というのは意味ではないと。意味でとろうと思ったら無理なところがある。リズムを読んでいるうちに意味が後から付いて現れてくるものであると申し上げるんですけれども，なかなかわかってもらえない。「あぢさゐ」の歌を読むとあじさいの花が急の雨に濡れてしっとりしながら夜も昼もそこに生えているという，それだけのことのなんともいえない味わいというものが，連れて行ってくれる，そういうことを，読みなれているととても味わい深くなっていくのではないかと思います。読んで「ああ，いいな」と思って頂ければ十分だと思います。意味も言ってごらんといわれても，言えるわけがありません。意味で言えないから，短歌をつくるのであって。よく理屈の好きな人は，理屈をおっしゃいますけれど，ぱっと読んでぱっと心に入ってきて，「ああ，いいな」と思う。その，日本語の感じというものが大事だなということを改めて思います。私も短歌を作りはじめて40何年になるんですが，若いときには必死で新しい言葉をつめこんだり，飛んだり跳ねたりいたしましたけれども，やっとこの頃，四十を過ぎた頃から「ああ，私はもう若くない」と思ったんですね。そのとき今まで私が作り続けてきた短歌というのは，私の若い生臭い体が作ってきた，その体がつかんできた言葉であったということにはっと気が付きました。ちょうどアメリカから帰ってきたときで，俵万智さんの『サラダ記念日』が出て，ああ，こんなんが

短歌かなと思っていたのですけれども，その時に私は日本語というものは難しいことを言ったり，理屈を言うのではなくて，高尚な言葉を使うのではなくて，平明な普通の言葉で，あっさりと静かに詠むことが一番大事ではないかなとふっと思いました。それから，私の歌の作り方がずいぶん変わったような気がします。そして，最近思いますのは，若いときには一首いい歌ができればそれでいいと思い込んでいましたけれども，歌というのは一生かかって，一枚の布を織るようにして，一首一首の歌を作っていけばいいんじゃないかなってことを思うんですね。いい歌ばかりではなくて，ただただ作り続けて織り続ける。そのときに何が見えてくるかということがとても大事じゃないかなということをこの頃思っております。

それから境涯詠について。境涯というのは身の上とか生きていく上での様々なこと。永田和宏，永田嘉七の歌と俳句をあげてみます。これは親子。和宏というのは私の相棒でして，朝日歌壇の選者をしておりますけれども，最近『百万遍界隈』という歌集を出しましてこういう歌をつくりました。

「母を知らぬわれに母無き五十年湖(うみ)に降る雪ふりながら消ゆ」

和宏という人は滋賀県の饗庭(あえば)のところで生まれた人でして，この歌集のまえに「風位(ふうい)」風の位，その前が「饗庭」という歌集が出ております。この人は母親の縁の薄い人でして，お母さんが3回変わってるんです。産みの母という人が，結核で28歳ぐらいで亡くなるんですが，母親の面影が全くない。というさみしい幼年時代を過ごした人なんです。大変それが大きな傷であったような気がいたします。私一緒に暮らしていて，この人はものすごく寂しい人だなとよく思うんですね。なんかドーナツのような人だと。周りはとてもしっかりしていて，よそにいってもしっかりした仕事をして，ちゃんと帰ってきますけれども，ぽかっと真ん中があいている。それは母親の愛情というものを全然知らないで育った人の寂しさだなと思うんです。そういう人がやっと五十年すぎてからこういう歌を作ったんです。

湖(うみ)というのは琵琶湖ですね。湖に降る雪，雪は降りながら，琵琶湖の水面に触れると消えていく。そういう様子をみていると，自ずと自分の思いが，母がいなかった寂しい五十年という自分の人生の時間と重ねて思われるんだ，そういう意味だと思いますけれども。和宏がこの歌を作ったときに私は，ああそうか，と思いました。短歌で悲しいこと，うれしいこと，楽しいこと，自分の心にものすごく響いたことを表現しがちであるという風にみんな思っているんですけれども，本当に一番悲しいこと，一番人に触って欲しくないこと，自分の口で言いたくないこと，そういうものを表現するにはとても長い時間がいるんじゃないかなと思いました。そういう長い時間を経て，やっとこの歌を作ることができるようになったんだということを，そばにいて大変感じております。

それで，次の嘉七というのは和宏の父親なんですけれども，『西陣』という句集を出した。この嘉七さんは散文的と言うか，話の続かない人で，私が一生懸命言い募って話しをしてもですね，「あ，さよか」と言ったらそれで終わりなんですね。二の句が告げない。

愛想のない親父さんでして。その親父さんが句集を出して，いろんな句を読んでいると，ああ嘉七さんはこういうことを思っていたんだ，俳句という表現の中で自分の心を詠んでいらっしゃる，その心というものを感じまして，ちょうど和宏が五十年を使っておりますから，これを併せて御紹介いたしますが，

「五十年ひたすら妻の墓洗う」

これは和宏を産んだお母さんです。嘉七さんは3回妻を迎えるわけですけれども，ともかく，五十年ただただひたすら初めの，一番初めの妻の墓を洗い続けてきたのであるとそういうことを詠んでいらっしゃいます。

最後に「たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり」

これは，私の代表歌といわれております。高校の教科書に載っております。20代の頃，東京に5年ぐらい暮らしておりました。私は東京がいやでいやでしょうがなかったんですね。滋賀県で育ったんですが，知らない風土に行ったときにはじめて近江という風土が，ひたひたひたひたと心に沁みるように見えてまいりました。琵琶湖というところは真夏でも暗かったな。とか，すごく湿気を含んだ風土だったなとか，いろんなことを思いました。そういうときに，29歳の私が作ったものです。それで，たっぷりとした真水というのが琵琶湖なんですが，琵琶湖を抱いている近江という風土は昏い器であったなということを思ったわけです。私はそういう風に作ったんですが，大岡信さんやいろんな方がそういう読み方をなさらないで，近江というのは琵琶湖であると，そしてそれは母胎であるというような読み方をされていて，作者の私は大変びっくりいたしました。近江というのは母胎，胎児をつつむ胎。琵琶湖というのは羊水みたいなもの。そこに胎児を抱え込んでいる。そういうものである。そして，近江京のあった古い都である。歴史的にも遡れるし，母胎でもあるという風に詠めるんだという読み方をされました。私は大変意外な気がいたしましたけれども，まあ，俳句でもそうですが，大変短い詩型というのはいろんな読み方をされる可能性を大変たくさんもっているということですね。

例えば，蕪村の「五月雨や大河を前に家二軒」

という有名な句があります。梅雨の大雨で水かさを増した大きな川の前に心細げに家が二軒あるよというように読めますね。ところが，これは与謝蕪村のお嬢さんが嫁がれて，出戻ってきてそして二人心細く暮らしていらっしゃるということを詠んだ句であるということは，その句会にいらした方はみんなわかったわけなんですよ。そういう風に詩型の短さというものは，非常にいろんな読み方を誘うところがあって，そのあたりの幅の広さ，深さが，大変面白いとおもいます。

今日の私の話から，また短歌というものを違う角度から読み返していただければありがたいと思います。ありがとうございました。

歌のおもしろさ　於アスニー　平成十八年五月二十六日

河野裕子

資料

○東(ひむがし)の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

柿本人麻呂『万葉集』巻一

▼小さな景から大きな景へ

○ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱『新月』

▼景を絞り込む　リズム

○あぢさゐの藍のつゆけき花ありぬぬばたまの夜あかねさす昼

佐藤佐太郎『地表』

▼母音　漢字　対句　リズム

▼愛誦性

◎表現について

▼意味はあとからついて来る

◎境涯詠

○母を知らぬわれに母無き五十年湖(うみ)に降る雪ふりながら消ゆ

永田和宏『百万辺界隈』

○五十年ひたすら妻の墓洗う

永田嘉七『西陣』

◎色々な読みかた

○たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり

河野裕子『桜森』